

家族のために

「アテ・マサン(筆者のよみ名)、やっぱり妹がカレッジへ通う学費を稼ぐために、六月になったら海外へ出稼ぎに行こうと思います」。

アマミラからメールが届いたのは、今年の四月であった。アマミラはフィリピン南部ミンダナオ島のジェネラルサントス市に住むイスラーム教徒の二四歳の女性である。父親を亡くし、母親と妹の三人家族。高校卒業後、地域社会で保健活動を行う団体で働いていたが、ほとんど報酬がなく、家族に負い目を感じていた。

ジェネラルサントス市周辺沿岸部のイスラーム教徒のコミュニティでは、海外へ出稼ぎに行く女性が一九九〇年ごろから増えている。その理由は、アマミラのように「家族のために」というものが多い。「商売をはじめの資金をつくるために」という人もいる。彼女たちの大多数が、同じイスラーム教徒が多く生活する中東の産油国で家事労働者として働いている。

「ジェネラルサントス市で仕事を探そうとしたら、イスラーム教徒はロリストだつていうのよ!」ジララが悔しそうな表情を浮かべた。

フィリピン南部では、少数派のイスラーム教徒中心の武装集団と政府軍とのあいだで武力衝突が続いている。とりわけ「九・一一同時多発テロ事件」以降、一般のイスラーム教徒に対しても差別と偏見が強められ、彼らが地元で就職するのは、いさう困難になった。これも彼女たちが海外へ行く理由のひとつである。

家事で体験する階層格差

「海外では、とにかくいろんな種類の果物を食べたので、私の肌はヘスベになりました」。

があつたのだらう。

たとえばサウジアラビアでは、外国人家事労働者には労働法は適用されず、定期的な休日や自由な外出は認められない場合が多い。それに対して、アラブ首長国連邦やクウェートでは、比較的行動の自由が許されるようだ。そのため、ここでは「オープン・シテイ」であると表現され、渡航先として人気が高い。家族や友人から離れる孤独感や、雇用者の一存によって形成され

幼い子ども二人をおいて、サウジアラビアで家事労働を体験したアティマは、苦勞の多かった経験のなかで、この話をするときだけは目を輝かせた。

一般的にフィリピンから海外へ出稼ぎに行くのは最下層ではない。しかし、アマミラたちが生活する地域の少数派のイスラーム教徒には、これは当てはまらない。彼女たちの日常の食事は、たいてい山盛りのごはんとおかず一品。ジェネラルサントス市から二十キロも離れば、電気供給は不安定な小水口もまれ。竹やココヤシの木でつくられた小さな家に生活している。おもに中東産油国へ出稼ぎに行くのは、リクルーターなどに支払う手数料が比較的安いからでもある。それゆえに、海外での近代的な家庭における「家事労働」を通じて、階層格差を痛感することになる。

「あつちでは、カーペットを使用しているから、掃除機を使って掃除をしました」。

「洗濯機がやってくれたので、そのあいだに昼食をつくることができました」。

「雇用主の家は、三階建てだったので、スリランカ人の家事労働者が二階と三階の掃除を、私が



ほとんど使われないまま放置されていた洗濯機(サランガニ州)

一階の掃除と料理を担当しました」。狭い家のなかと周辺を竹ボウキで掃き、ポンプで水を汲んで、洗濯物を一枚一枚手洗する日常からは異なる体験である。どうやら、海外で家事労働を経験した女性のあいだでは、洗濯機が人気のものである。それで帰国後に洗濯機を購入してみても、電気と水の供給が十分でないので、結局あまり稼働しない。

孤独を抱きながら

また私が学生だったころ、海外での寂しい想いを共有しようとなりに語りかけたが、拒絶されてしまった。

「あなたはフィリピンで自由に動くことができるからいいけど、私たちには、そのような自由はありません」。

憤りをこらえようと顔を強ばらせたネナの表情が忘れられない。彼女には、「家事労働者という立場の孤独」と「気楽な留学生の孤独」を軽々しく一緒にしてほしくない、という気持ち



海外出稼ぎから帰国したイスラーム教徒の女性(ジェネラルサントス市の市場にて)

アマミラからメールが届いた。「アテ・マサン、やっぱり海外に行くのをやめた」。出稼ぎの孤独やリスクを思いやると、正直、とこもホツとした。



海外出稼ぎで貯めた資金を元手に小規模雑貨店を開く女性(サランガニ州キアンバ州)



海外出稼ぎから帰国する家族を出迎える人びと(ニノイアキノ国際空港)



サウジアラビアなどで働くフィリピン人を求めるエージェンシーの看板(マニラ市内マビニ通り)

海を越える 家事労働者

見ごろ・
食べごろ
人類学

石井 正子

(いしい まさこ)

地域研究企画交流センター